

(資料1)

シャルロット-ローズ・ドゥ・ラ・フォルス嬢作
『ペルシネット』(フランス語), 1698

百 田 み ち 子*

Persinette. Französischer Urtext von Charlotte-Rose de La Force (1698)

MOMOTA Michiko

ふたりの若い恋人たちが長い恋の末に結婚しました。彼らの熱情は何にも比べようがなく、欲びと幸福のなかで暮らしていました。その至福は若妻の妊娠で頂点に達しました。それはこの小さな所帯にとって大きな欲びでした。彼らはとても子供を望んでおり、やっとその願いが叶えられたのです。

近くにひとりの妖精が住んでいて、ぜひ美しい庭を持ちたいとおもっていました。庭はあらゆる種類の果物、植物、それに花々でいっぱいになっているのが見えました。

当時その国ではパセリはではとても稀なもので、妖精はインドから取り寄せていました。国中どこを探してもパセリは彼女の庭でしかみつからなかったでしょう。

新妻はそれがとても食べたくりましたが、自分の欲求を満たすのが困難な事をよく知っていました。というのは、誰も妖精の庭に入れませんでした。それで、悲しみのあまり夫の目にも誰か見分けがつかなくらいやつれてしまいました。彼は身体的にも精神的にも驚くほどのこの変わりような原因を詳しく聞きただしました。妻は、相当抵抗したのち、パセリが食べたくてしかたがないのだとやっと白状しました。夫は満たすのがこん

なに困難な欲求に溜息をつき困惑しました。しかしながら愛には困難なものは何もありません。彼は昼も夜もこの庭の塀の周りに行き、登ろうと努めます。しかし塀が高すぎてとても登れません。

ついにある夜、庭の扉の一つが開いているのに気づきました。そと庭に忍び込み、運よくパセリをすばやく一握り摘み取り、入ってきた時のように出ていき、盗んだパセリを妻に持って行くと、彼女はむさぼるように食べました。二日後、彼女は、かつてないほどパセリがまた食べたくになりました。

当時のパセリは格別な味だったにちがいありません。

それから哀れな夫は何度かまた庭に行きましたが無駄でした。しかしついにその粘りは報いられ、また庭の扉があいているのを見つけました。入ったところ、妖精がいるのに気づきひどく驚きました。紛れもなく妖精です。彼女は、誰であれ、入るのを許されていない場所に来た彼のふてぶてしさについて、ひどく彼を叱りつけました。

善良な彼は恥じ入りひざまずいて妖精に許しを乞い、次のようにいいました。「すこしでもパセリを食べなければ妻が死にそうになるのです、妻は身ごもっており、こういう欲求は仕方のないこ

* 人間環境学部環境文化学科 准教授
2007年9月27日受付

となのです。」すると妖精は彼に、「お前の妻が産む子供を私にくれるならほしただけパセリを持って行ってよい」といいました。

夫は少し熟考したのちその約束をし、思う存分パセリを摘んでいきました。

お産の時がくると妖精は母親のそばに赴きました。やがて母親は女の子を産み落とし、妖精はその子をペルシネットと名づけました。妖精は、金の布の産着にくるまれた赤ん坊受け取り、持っていたクリスタルの瓶の中の貴重な水を赤ん坊の顔にかけました。するとその瞬間、この世で一番美しい女の子になりました。

この美の儀式のあと、妖精は小さなペルシネットを家に連れていき、とても想像できないくらい大切に育てさせました。ペルシネットは十二歳に達しないうちに素晴らしく美しい娘に成長しました。妖精はこの娘の宿命をさと、数々の運命から逃れさせる決意をしました。

そのために妖精は魔法を使って森の真ん中に高い塔を建てました。この不思議な塔には入り口はありませんでしたが、もし太陽が差し込めば柘榴石の火花で日光を取り込めるたくさんの立派な部屋がありました。生活に必要なものはすべてそこに見事にそろっていました。その場所には珍しいものすべてが集められていました。ペルシネットがキャビネットの引き出しをあければ、中は最高に美しい宝石でいっぱいでした。彼女の衣装ダンスはアジアの女王たちに負けないくらい豪華でした。最新のファッションはどれも彼女が一番に着ることができるのです。彼女はこの立派な住まいにたった一人でいるのです。一緒にいてくれる仲間がほしくて仕方ありません。これを除けば、彼女の願いはすべて叶えられ満たされているのです。

いうまでもなく、食事も毎回最高においしい料理を食べていました。でも次のことは確信できます。彼女の知り合いは妖精だけでしたがひとりぼっちのなかで決して退屈することはありませんでした。読書したり、絵を描いたり、楽器を奏でたり、申し分なく育てられた娘がよく知っているあらゆることをして楽しみました。

妖精は彼女に塔の上部で寝るように命じました。そこには窓が一つあるだけでした。妖精は彼女をこの魅惑的な孤独のなかにおくと、窓から降りて自分の家に帰りました。

ペルシネットは一人になるや否や、たくさんのいろんな気晴らしをしました。小箱の中をかき回すだけでも結構な大仕事だったのです。こういうことをして楽しみたい人々はたくさんいるでしょう！

塔の窓からの眺めは世界一の美しさでした。というのは片側には海が見え、もう片側にはこの広い森が見え、この二つの風物は独特で魅力的でした。ペルシネットは女神の声をしており、歌うのがとても好きでした。とりわけ妖精を待つ時間の気晴らしにしばしば歌いました。彼女は妖精がかなり頻繁に来るのが見えました。塔の下にくると、いつも「ペルシネットや、お前の髪を垂らしておくれ、登るからな」というのが妖精の習慣になっていました。30オーヌ（1オーヌは1,888メートル）もあるが始末にこまらない長い髪はペルシネットの類まれな美しさの一つで、純金のようなブロンドは何種類もの色のリボンで結い上げられていました。妖精の声が聞こえると彼女は髪を解きそれを下に垂らしました。すると妖精が登ってきました。

ある日ひとり窓辺にいたペルシネットは、世界でもっとも麗しく歌いはじめました。

丁度そのとき若い王子が狩りで鹿を追いかけ、一人だけ離れたところへ来ていました。かくも快い歌声が聞こえてきたのでそばに近づくと、若いペルシネットの姿が目にはいりました。王子は彼女の美しさにうたれ、声に魅せられました。この運命の塔のまわりを何度も廻るのですが入り口が見つかりません。彼は苦しみで死にそうになりました。恋する男でした。大胆でした。なんとしても塔によじ登ることができればと思いました。

ペルシネットの方はこんなに魅力的な男のひとを見て声も出ませんでした。ひどく驚いてしばらく彼を見つめていましたが、突然彼女は窓辺から身を引きました。この男のひとはきっと何かの怪

物に違いない、そういえば目で殺すものがあるということを知ったことがある、と思いました。彼の眼差しをととても危険なものに感じたのです。

王子は彼女の姿が消えたので絶望してしまいました。一番近い人里で塔についての情報を得ました。それによると、ある妖精がこの塔を建て、そこにひとりの若い娘を閉じこめた、というのです。王子は毎日そこをうろつきました。何度もうろついたら、やっと妖精がやって来るのが見え、「ペルシネットや、お前の髪を垂らしておくれ、登るからな」というのが聞こえました。と同時に、あの美しい人が長いお下げ髪を垂らし、妖精がそれをつたってのぼっていくではありませんか。王子はかくも尋常でない訪問の仕方にひどく驚きました。

翌日、いつもならもうとっくに妖精が塔に入る時刻なのに現れません。王子はかなり苛立って夜を待ち、窓の下に近づき、妖精の声をみごとにまねて、「ペルシネットや、お前の髪を垂らしておくれ、登るからな」といいました。あわれなペルシネットはこの声色にだまされて、窓辺に走りよって美しい長い髪の結びを解きました。王子はそれをつたって登っていきました。上の窓辺に着いたとき、この驚くような美女をこんなに近くから見て、下に落ちるのではないかと思いました。しかしながら、自分の生来の大胆さを取り戻し、部屋の中に跳びこみ、ペルシネットの足元にひざまずき熱烈に膝に接吻したので、彼女は王子の気持ち理解できました。彼女ははじめ怖がり、叫び、少し震えましたが、自分のなかに自分が王子の中におこした恋情に劣らぬ恋の炎が燃えているのを感じた時、やっと安心できました。王子は彼女に世界中でもっとも美しいことを語りました。彼女がそれにこたえたときの取り乱した姿は、彼に希望を与えました。王子はついに、より大胆になり、今この場で結婚してくださいと申し込みました。彼女はほとんど自分が何をしているのかわからないまま、それに同意し、同様にすべての儀式も終えました。

いまや王子は幸福そのもので、ペルシネットも

また彼を愛するのに慣れ、ふたりは毎日会っていました。やがてまもなく彼女は身ごもりました。経験したことのないこの状態を彼女はひどく不安がり、それに気付いた王子は彼女を苦しめるのではないかと恐れ、それを説明したくありませんでした。

しかし、ペルシネットに会いにきていた妖精は、見てすぐには気づきませんでした。やがてペルシネットのつわりを知りました。妖精は「なんと哀れな娘か！お前は大きな過ちをおかしたので罰せられよう。わしの予知はむなしく、運命は避けられなかった」とペルシネットにいいながら、断固とした調子で、ことのいきさつを残らず告白するよういいました。ペルシネットは涙で目を潤しながらいつけに従いました。

話を聞いたあと、妖精はペルシネットがどんなに感動的に語っても恋愛などには全く心を動かされませんでした。そして貴重な紐というべき彼女の髪をつかんで切ってしまいました。それから彼女を下ろし、妖精も窓から降りました。下に着くと、妖精はペルシネットと一緒に雲に乗って海岸まで行きました。それは人気のない場所でしたが、心地よい所でした。そこには、牧場や森や穏やかな小川や常緑の木の葉で造られた小屋がありました。小屋の中にはハリエニシダの寝台が一台あり、その横に、とても美味しく、いくら食べてもくならないビスケットの入った籠がありました。

妖精がペルシネットを連れて来たのはこういう場所でした。そしてそこへ置き去りにしました。その前に、妖精はさんざんペルシネットを咎めました。その咎めを聞くことは彼女にとって自分の身におきている不幸より、何倍もつらく感じられるのでした。

ペルシネットがかわいい王子と王女を産んだのはこの場所でした。二人の子たちを育て、始終自分の不運を泣いて暮らしたのもこの場所でした。

しかし妖精はまだ完全な復讐を遂げたとは思っていません。王子を自分の意のままにし、ペルシネットと同様、彼も懲らしめなくてはならないのです。不幸なペルシネットのもとを離れるや否や、

塔にのぼり、ベルシネットが歌っていた調子で歌いはじめました。王子はすっかりこの声に騙され、ベルシネットに会いにきていた彼は、以前していたように上に登るために、髪の毛を垂らすようにと再度いいました。不実な妖精がわざと切ってしまった美しいベルシネットの髪を王子のところに降ろすと、王子は窓まで登ってきました。そこに自分の愛する人の姿が見えないのに驚き苦しみました。王子はベルシネットを目で探しました。しかし妖精は怒って彼を見つめながら、「この向こう見ずめ！お前の罪は尽きない。ひどく罰してやる！」といいました。しかし王子は自分にだけ向けられているこの脅しに耳をかさず、「ベルシネットはどこですか？」といいました。「あれはもうお前のものではない」と妖精は言い返しました。その時、王子は妖精のわざの力に屈してというより、心痛の激しさに動揺して、高い塔から下へ身を投げました。身体じゅうがひどく砕けたはずなのに、失明しただけで他に傷はありませんでした。

もう自分の目が見えないのを感じた時、王子はひどくびっくりし、しばらくの間、塔の下でじっとしたまま、呻き、ベルシネットの名を何度も何度もいいました。彼は力の限り歩きました。はじめは手探りでしたが、彼の歩みはだんだんとしつかりしてきました。そばで支えてくれる人にも出会うことなく、どれほどの長い間をこのように過ごしたことでしょう。空腹で仕方ない時は、道々でみつけた草や木の芽を食物にしました。

数年後のある日、王子は常になく自分の恋と不幸の思い出の念にかられ、木の下に横たわり、悲しい感慨に耽っていました。こういうことは自分にはより恵まれた境遇がふさわしいと思っている人には残酷なものです。突然聞こえてきた魅力的な声音によってこの物思いから抜け出しました。最初の声は心まで達し、染み入り、もう久しく感じる事のなかったやさしい情感を伴っていました。彼は、「おお！ベルシネットの声だ」と叫びました。

彼は間違っています。少しずつ彼女のいる無人の里へ来ていたのです。彼女は小屋の戸口に座って自分の不幸な恋物語を歌っていました。

彼女の二人の子供達は太陽より美しく成長し、母親の近くで遊んでいましたが、少し離れて王子が横たわっている木のそばまでやってきました。王子を見るといよりはむしろ二人とも首にすがりつき始終、「お父様だ」といいながら何度もキスしました。そして母親を呼び、その大きな声で彼女は駆けつけましたが、いったい何がおきているのか分かりませんでした。そのときまで母子だけの孤独な暮らしを乱すようなことは何一つ起こらなかったのです。

自分の愛する夫だと知った時の彼女の驚きと喜びは如何ばかりだったのでしょうか、表しようもありません。鋭い声をあげ、彼に飛びつきました。その感動は激しく、自然なことでしょうがとめどもなく涙があふれてきました。しかし奇跡が起きました！その貴重な涙が王子の目に落ちるや否や目は光を取り戻したのです。かつてのようにはっきり見えます。情熱的なベルシネットの愛情のおかげです。彼はベルシネットを腕に抱きしめ、かつてしなかったような愛撫を何度も繰り返しました。

この立派な王子、魅力的な皇太子妃、そして愛くるしい子供達が我を忘れるほどの喜びと優しさに包まれているのを見るのは心打つ光景でした。

昼間はこの喜びのなかで過ぎましたが、夕方になるとこの小さな家族には少し食物が必要になりました。王子がビスケットを取っていると思っていたら、それは石に変わりました。彼はこの怪奇異変に仰天し、苦痛の溜息を漏らしました。哀れな子供達は泣き、困り果てた母親が水でも少し与えようとすると、それは水晶に変わりました。

なんという酷い夜でしょう！一家はこのかなり辛い夜を過ごしながらか、それが永遠に続くように思えてなりませんでした。

夜が明けると彼らはすぐ起きて、すこしばかり野やさいを摘むことにしましたが、なんということでしょう！草はヒキガエルや毒虫に変わり、もっとも無害な鳥でもドラゴンやハルピュイアになって彼らの周りを飛び交いました。それは、見るとぞっとするほど恐ろしいものでした。「もう、万事尽きた！いとしいベルシネットよ、お前に再

会したのはさらにひどい方法でお前を失うためであったとは」と王子はいいました。ペルシネットは王子に優しく接吻しながら、「いとしいあなた、死にましよう、死んで、私達の愛は死さえも甘美なものであったのだと、私達の敵を羨ましがらせてやりましようよ」と答えました。

彼らの哀れな幼い子供たちは両親の腕に抱かれ、気を失い、もう死にかけていました。この痛ましい一家が死に瀕しているのをみて心を動かされなない人がいるのでしょうか？かくして彼らのために奇跡が起きたのです。あの妖精が心を動かされたのです。この瞬間、かつて愛すべきペルシネットに対して感じていた優しさのすべてを思い出しました。妖精は金と宝石で輝く馬車で彼らのいる場所へやってきて、彼らを乗せました。馬車は豪華なタイル張り、自分はこの幸運なカップルの真ん中に、彼らの可愛い子供たちは両親の足元に、という風に乗って、妖精は彼らを王子の父君の王宮まで連れて行きました。そこでは非常に喜びよう、ずっと長く行方不明だと信じていたこの美しい王子をまるで神のように迎えました。王子は波乱の人生を生きた後で得たこの安らぎを非常に喜びました。彼の完璧な伴侶と暮らす至福に比べるものはこの世にまたとないのです。

優しい夫たちよ、優しい妻たちよ、これらの主人公達から、学びなさい、いつも貞節であるのが良いということを、心労や労苦やもっとも辛い心配ごと、それらはすべていずれやわらげられるということ、二人の情熱が相互的であるときは、運命に立ち向かい、逆境を乗り越えるでしょう、二人の心がいつも結びついていれば。

註

訳出したテキストは

PERSINETTE in Rapunzel ---- Traditionen eines europäischen Märchenstoffes in Dichtung und Kunst, Brüder Grimm-Museum Kassel, 1993, pp.17-27 である。

和訳の際、随時以下も参照したことを付記しておく。
PERSINETTE in Contes, Édition critique établie par Raymonde ROBERT, Bibliothèque des Génies et des Fées, Honoré Champion, Paris, 2005, pp.331-338

最後に、これは2006年度百田ゼミの卒業研究のための資料として訳出したものであるということをつけ加えておく。卒業論文のタイトルと目次は以下の通りである。

先行作品との比較からみた『ラプンツェル』
—イタリア民話とフランス民話とグリム童話—
環境文化学科：本多 晋 (2006年度卒業)

目次

はじめに

- 1章 ラプンツェルとはどういう話か
- 2章 ヨーロッパの昔話の伝統上のラプンツェル
 - 0. 方法論：文体的比較、類話の比較
 - I. グリム初版と決定版の比較
 - II. 先行作品としてのフランス民話
 - 1. フランス民話『ペルシエット』あらすじ
 - 2. ラ・フォルス嬢の『ペルシネット』あらすじ
 - 3. 二作品の比較（共通点と相違点）—素材と出来事
 - 4. ラ・フォルス嬢の『ペルシネット』とピーアリンクのドイツ語訳『ペルジネット』とシュルツのドイツ語訳『ペルジネット』との比較
 - III. 先行作品と考えられるイタリア民話
 - 0. イタリア民話について
 - 1. 『ペトロシネッタ』あらすじ
 - 2. 『プレツェモリーナ—パセリむすめ—』あらすじ
 - 3. 『ペトロシネッタ』から『プレツェモリーナ』への移行
 - 4. 『ペトロシネッタ』と『ラプンツェル』との共通点と相違点
 - 5. 『プレツェモリーナ』と『ラプンツェル』との共通点と相違点
 - IV. 先行作品同士の比較と先行作品とグリム童話との比較
 - V. グリムの独創性

おわりに